# 男女のセクシュアリティーの展望について

田　中　菊　子

要　約

本稿では日本人の性のあり方について，過去の性の歴史を振り返りながら検討し性とはなにかを模索するものである。過去の歴史を見ると女性の性がいかに男性によってコントロールされていたか，そして不自然な偏見に満ちた性は日本人の性に関する思考と行動に今だに根強く残っているかが分かる。また平成12年度のエイズ動向委員会の感染者の動向の報告では，おとなの特に男性の性について考察している。本稿は東洋学園大学と東洋女子短期大学の「健康教育」「女性の健康」の授業を履修している学生の性についての意見をもとに，「性は下半身教育ではなく，生であること」を確信し，ポルノグラフィーの役割と罪について検討する。さらに，今後の性教育との関連で性をオープンに語ることの必要性と「性とは何か，どうあるべきか」について考察する。

## はじめに

このほどイタリアで開かれた主要国首脳会談（ジェノバ・サミット）においてエイズ感染者の対策基金「世界エイズ保健基金」の設立が決まった。2000年に新たに HIV に感染した人々の数は530万人におよぶ。南アフリカ各国では３割が HIV に感染しているといわれ，今やエイズは世界的な重要疾病の一つになっている。

そして日本では1985年に厚生省が HIV 感染者数の統計を開始して以降はじめて累積感染者数が5337人（血液製剤を除くと3905人）に達した。そして昨年一年間に厚生労働省に報告された新たな AIDS 患者数は327人で過去最高を記録した。感染者に占める20代の割合は約３割で，男性の割合が７割を占め，その８割が国内感染であり，初めて同性間接触による感染が異性間接触による感染を上回った。

エイズ動向委員会の委員の次のようなコメントが載っていた。「……感染者が増えた原因は『性的パートナーの増加と初交年齢の低下など性行動の変化が考えられる』……」果たしてそうなのだろうか。統計で見る限りに於いては初交年齢の低下とエイズとの関連は読みきれない。

若者・女性を含め人間の「性」は「抑制」「管理」「指導」「干渉」「差別」「保護」「禁止」の対象となってきた。それを進めてきたのが国家，学校，家，男，教師，父母，夫，法律，習慣，宗教であった。特に子供と女性の性への他からのコントロールは強く，例えば結婚，離婚，出産，中絶，避妊などのプライベートな行為も当事者の個人意志で決定できない状態は未だに続いている。

今日，社会全体が性に対して正面から取り組み，「性とは何か」について真剣に学ぶことが必要とさ

れている。過去の歴史を振り返ってみても男性からの「性」とはいつも男性自身の性の快楽のために存在し，子孫繁栄のために存在していた。今改まって人間の性のあり方を学ぶべき時ではないか。

そこで今回は日本の「性の歴史」を振り返り，日本人の性的基準や性的偏見がどの様に作られてきたのかを探り，次に現在問題になっているエイズの動向で何が問題なのかを考察し，今後どのような性教育が必要なのか検討したい。

## 近世の性について

江戸時代の性愛の体系は，家にあって家事と生殖を担当する〈地女・妻・素人女・聖なる女〉と，遊郭にあって男性の性的欲望に奉仕する〈遊女・妾・玄人女・みだらな女〉という2つのカテゴリーを持っていた。

日本の家族制度の下では，外部からの血が混入して家族の血が断絶してはならないということで，妻の姦通は厳しく禁じられねばならなかった。

実はこの時代から，仏教から派生した儒教が幕府の政治思想の中核を担っていたことから，貝原益軒の「女大学」で代表される女子教育は江戸時代から明治にかけて普及し，「良妻賢母」をはじめとする「貞操」が徹底され，女性は性愛の喜びを露に出すものではなく，性的な事を口にすることは最も恥じるべきことだとたたき込まれたのである。そのために女性は夫一人を守るように仕向けられ，「性とは卑しいもので，恥ずかしいものである」と信じ込ませられ，女性は子供を産むという生殖の性に限定されていた。ということは男性の性も家で豊かな性の快楽を創造することもなかったということであり，性の快楽は非日常の場で造られていくことになる。そこにこの時代の「おもての性」と「うらの性」という二つのカテゴリーが成り立ったのである。

また江戸の性文化として知られる浮世絵の「春画」は庶民階級にまで性の文化を普及させたといってもいいが，やはりそこにあるのは男根中心の性文化であるということには変わりはない。「江戸時代は性に寛容だった」といろんな文献に記載されているが実際には人身売買や遊廓等での性や，強制堕胎や里子など女子供の犠牲のうえに男性の性の快楽があったといっても過言ではない。

もう一つ「夜這いの民俗学」の中で，赤松啓介氏は前近代から近代まで農村では性が非常に自由だったといっている。赤松氏も実際に郷里の兵庫県を中心に行商をしながら村人に聞いたり，実際に見たり，自身も経験しながら「夜這い」について事細かに調べ上げている。「娘が夜這いをする資格も村によって様々で12,13歳で月経があれば夜這いさせる村もあれば15,16歳になっても毛が生えそろうまでは夜這いをさせない村もあった」「娘が気に入っている男が当然のことながらいたわけで，昼間，娘のほうから松葉を紙に包んで相手に渡して誘うこともあった……。一方で気に入らない男の足音がするときっちり戸を締めてしまう。男はすごすごと帰るしかなかった。」「村の過酷な肉体的労作業を続けて，なお性的作業をやったのではますます疲労が大きくなるという疑いもあろうが，人間の肉体と言うものはそれ程単純なものではない。青，壮年期には肉体的疲労が大きいほど，性的欲望も激しくなってくるのが様相である。……」「村の娘たち15～20人を一回りしたらもうあきて他の村に行くこともあった」「相手のわからぬ子供が生まれても村の子として育てられた」[1]等々。どうして

も腑に落ちないのが12,13歳の少女が夜這いを受け入れなければならない社会がそこにはあったわけで，それは一種の強姦ではないかとも思うのであるが，そこに書かれているのはあくまでも明るいおおびらな性なのである。

以上近世の性のついて触れてみたが，性的なことを口に出来ない女性，快楽を享受に思い悩む女性，ただ黙って夫とのセックスを生殖のためにだけ行っている女性，男性の快楽のためにだけ存在していたかとも思われる女性等々，「夜這いの民俗学」の中に登場してくる明るく語られている性などは別にして非常に抑圧的であり，まさにどの時代においても「家父長制的」でない時代はなかったと指摘されている。そして現代も残存している男女の性的二重基準は今後変わりうるのだろうか。

## 近代社会の公娼制度の確立

明治期になり，はなから男と女の性は違うというのが前提で，政府は男の性欲処理のための場を公に認めた。この時期に確立した近代の「公娼制度」は日本が開国によって世界資本主義に包摂され近代国家が樹立される中で，欧州の公娼制度をモデルとして再編成されたのである。

1872年の９月から約１年間，欧州各国の警察制度を視察した川路利良と大久保利通によって，内務省の創設とそこに管轄されるべき警察機構の整備がなされた。川路は警視庁発足とともに大警視の地位に就き，その権限を駆使して日本に欧州流の公娼制度を導入するに到った。明治時代以前の「公娼制度」との違いは「強制性病検診制度」の導入にある。これは開国と同時に欧州からもたらされている。他のアジア諸都市と同様，日本にも開港と同時に，外人遺留地に白人を相手にする売春街が登場してくる。長崎の遊廓はもとより，横浜遊廓，東京の築地に遊廓（吉原の廓業者により設立），神戸の福原遊郭が誕生した。そして白人を客とする娼妓に検診が強制されていた。

1872年の娼妓開放令は人身売買の廃止を明言したが，その直後の貸座敷・娼妓規則によって，人身売買は禁止するが自由意志の営業は容認するという名目が成立した。やがて，1990年代の自由廃業の権利が認められ，公娼制度の全国的統合を図る内務省令第44号「娼妓取締規則」が公布され，これにより公娼制度は全国的な広まりを見せた。ちなみに貸座敷と娼妓からの徴税は1888年以後「人民遊惰ノ醜業」とみなされ，公式には国税，地方税に属さない収入になったため，地方官は自らの権力を維持するために消費し，自由自在に私服を肥やしていた時期もあった。しかしこれはすぐさま地方税に組み込まれ，遊廓が拡大し娼妓が増大すればするほど地方財政が充実し，各地方庁はぞくぞくと新しい遊廓を認可していった。このように公娼制度は，明治政府の下で近代的に再編され，人民収奪体系として機能し，日本の下層階級の女性のみならず植民地の女性をもその底辺に編入していく。日本の国内階級支配とアジア侵略が生活難の果てに芸娼妓になるものを生み，年端も行かない少女がわずかな前借金で親元から引き離された。そして日本のアジア侵略が全面的に軍事化する過程で「軍人慰安婦」政策が実施され，20万人以上ともいわれる膨大な多民族女性が性的奴隷化されていくのである。

近年の「軍隊慰安婦問題」に対する日本社会の反応にも，歴史的に形成されてきた日本人の性倫理，性暴力，性的搾取の犠牲者に対する抑圧の根深さが露呈している。日本人「慰安婦」は自分の意志で従軍した売春婦だったから自業自得だが，アジアの「慰安婦」は強制連行された処女だったから気の

毒だ，といった反応を示す。その含意は，金銭授受があれば本人の合意した商行為であり恥じるべきは売春婦の側であるというのである。

## 女性の苦しみ

今ではセクハラという言葉が日常的に使われ，職場においてもまだ多くの問題はあるにせよ，女性が裁判を起こす事例が多くなってきているために，男たちのセクハラに対する認識の甘さが浮き彫りにされている。昔だったらお尻を触るくらい愛嬌で済まされていたものがいまやれっきとしたセクハラである。

女工哀史で知られる製糸工場や紡績工場で働いていた女工もさることながら，明治期から女性の職業として教員や事務職等などの職種の広がりが見られる職業婦人もまたセクハラに対象になっていった。

女教員が校長の誘惑を拒否したために様々な嫌がらせを受け退職にいたることもあった。かつて新聞記者として働いていた西崎花世（後に生田姓）は職を守るために処女を失った。生田はその経験に基づいて「食べることと貞操と」（『反響』1914年9月）に次のように書いてある。「女の仕事，女の独立の生計が今日の日本の社会をどう探しても見つけることが出来よう？どれもこれも苦痛で薄給で，不満で，不道徳で，働いてなお且つ餓えるより外には女の生き様がない」「この今の日本の家族制度及び社会制度が女をこのように困らせるのである。女に財産を所有させぬ法律がある限り及び職業がない限り女は永久に『食べることと貞操』との戦いにおそらく日に何百人と云う女は貞操よりも食べることの要求を先とするのである」[2]。と当時の女性はセクハラを受け，妊娠し，「私生児」としての差別扱いや母親への汚名か，堕胎罪で懲役刑か，もしくは「ヤミ堕胎業」に頼んで，あえて危険な堕胎を行うかの選択しかなかったのである。

現代の老人の性に関してもよく言われることではあるが，夫と妻の性交にたいする受け止め方が大いに違うのは，上記のように妻は性に対して積極的になってはいけないし，口に出すのも恥ずかしいと云う事が当たり前であったし，自分は性には興味も関心もなくみだらな女とは違うと，そんなことで女性として妻としての最大限のプライドを保っていたのではないだろうか。性愛の喜びを口のするのは「卑しく，恥ずかしい女性」だけであり，たとえ妻として性愛の喜びを感じたとしても，口や態度などで示すことは考えもつかない時代であった。それは当然である。女性が自らの性を語ることなく，男性の言いなりになるしかない時代なのだから。老人の女性の中には「あんなものないほうがいい」という程，うとましく思っている人もあり，当然，「夫の性欲処理役」「夫婦だからしょうがない」とあきらめている人は多かったはずだ。

「性の歴史」は女性がどのように生きてきたのかという「生の歴史」であり，これが学習されない限りの男女間の良き関係は成り立たないと思われる。それこそ歴史を学ぶことは過去の過ちを二度と繰り返さないためのものであり，これから来るすばらしい未来のためのものである。男性が自分たちの性について学習し，女性の性を理解し，また女性が自分自身の体を知り，自分たちの性の世界をもっと開発し，楽しくしなかったら男女双方にとって人生はほんとにつまらないものになってしまう。

そして今こそ，男と女，強いものと弱いもの優越性に明け暮れるのではなく，人間として，お互いを理解しあい，尊重しあう関係を築きたいものである。

現代の若者のいかに多くがいまだに，近代以降にもたらされた性についての男社会が作り出した女性に対しての「性への抑制」に縛られているか。そしてその「抑制」から学習することによって，どの様に学生の意識が変わっていったのか，次の文書を読み理解していただきたい。

## 女子学生の意識の変化（「女性の健康」の授業を受けて）

・私はこの授業を受けて，性についての考え方がだいぶ変わった。私だけでなく多くの若者がそうだと思うが，みんなもっと性について堂々と学びたいと心の中ででは思っているはずなのにそれを口に出せないでいると思う。子供が知らないことを学んで大人になっていくように，性についても知っている大人からもっともっと学び，理解していくことが大切である。私は今，「性教育」はなによりも大切だと考えるようになった。性は生きていく上で，何よりも必要不可欠である。パートナーと話し合って，わかりあっていくセックスがしたいし，自分の子供を持ったとき，マスタベーションを温かく見守ってあげられるようになりたい。今の自分ならきっとなれる。（2年　M・K）

・学校の性教育もまだまだ不十分であるから，セックスは結婚するまでいけないことのような気がしたけれど，もっと自由に考えていいのだと思った。最終的にどう考えるかはその人個人の考えであるけれども，誰もが必ず考えることであるので，どう考えたらいいかわからず苦しんでいたし，そのような人は多くいると思う。セックスは「なんとなくいけないこと」ではなく，「自然なことで，このような点に気をつけること」って感じに考えられるようになった。また，マスターベーションについても誤った思い込みがあったが，この授業を受けてもやもやが晴れました。自分が今まで考えてきたことで，どう考えたらいいかわからなっことがわかりヒントになりました。（2年　Y・H）

・最初は興味半分で授業を受けましたが，すごく自分自身考えが変わりました。セックスについてとマスタベーションについてです。……略。親がセックスとかマスタベーションにとてもいやらしいと云う考えを持っていると，子供にまで性はいやらしいものだと思い込ませてしまうことがわかった。女性も自分の性器や性的なことにもっと関心を持つべきなのだと思った。（2年　Y・K）

・中学生、高校性の頃は保健体育の授業で「体の仕組み」とかだけ軽く教わった。その頃はセックスやマスタベーションや性の快楽とかはすごく恥ずかしいことと思い込んでいた。だから友達とかでは性の話はしたけど，学校の先生とか親とかには話は出来る状況ではなかった。きちんと学ばないと雑誌とかでまた一方的は情報ばかり得てしまう。（2年　K・S）

・今まで「性」について話をされるといやらしいと感じていました。しかし，いやらしいとかじゃなくて「性」のことは自分のことで，知っておくべき重要なこととわかりました。
（2年　E・I）

・現代は「性」についてオープンなようで以外に閉ざされているような気がする。このままではきっと良くない傾向になってしまうであろう。今までの教育はやっぱり臭いものには蓋をしろみたいなところがあって，危ないとか，怖いとかばかりで実際どうなんだということを教えてくれなかった気がする。自分の体のリズムと避妊については何回もやったのに皆の中には「それでも避妊しない」と答えている人がいてびっくりしました。（2年　H・O）

・私は小さいときから性とは良くないものだと教わった。「テレビで出る性に関すること，場面は見ちゃだめ！」何で？と思いながら従っていました。私は子供にはそんな場面を利用していろいろ話してあげようと思います。（2年　K・M））

・この授業を受ける前までは「性」の話は恥ずかしいもので友達とふざけて話をするものだと思っていました。マスタベーションも男だけがするものだと思っていた。避妊についてもやらなければいけないとは思っていたが，実際周りもやっていないし，大丈夫だと安心しているところもあったし，そんな気にしてたわけでもないし，好きだからいいなんて考えもあった。でも自分の中での「性」に対する考えが変わった。恥ずかしいことでもないし，おかしなことでもなく，自然であることそして勉強したほうがいいかなと。（1年　Y・N）

・私はもともと「性」について興味があった。しかし今までこうやって真剣に正面から見つめる機会がなかった。他の人より抵抗なく授業に参加できるかなと思っていたが，それでも詳しく突っ込まれると，自分をごまかそうとしてしまっていた気がする。私の親も私がセックスをしていることを知ったとき，「信じられない！」「まだ早い！」「汚らわしい！」みたいな感じであった。あまりにもショックを受けている母に「なんだか変なの。最近の私たちからしてみれば恋愛感情の表現法として普通のことなのに」と思い，どうしてそこまで反対するのか疑問に思った。今母は「後悔しないようにね！（妊娠しないように）」と半ばあきらめているみたい。私に子供が出来たらきちんと話して伝えたい。何故ならセックスはルールを守ればとてもすばらしいものだと思うから。男の子が性に興味を持つように，女の子が興味を示すのは普通だと思う。高校ではまだ厳しいかもしれないけど，大学からでもこのような授業は取り入れるべきだと思う。援交の親父たちにももうちょっとどうにかしてもらいたい。（2年　M・E）

・小，中，高では学べなかったことが学べた。自分の性のついてこんなにも考えたことがなかった。今の人は性について何も知らないから，性について深く考えないのではないでしょ

うか。大人がもっと教えるべきだと思います。（2年　M・K）

・しっかりとした性教育があまりされていないから，今の若い人は性行為が増えたり，性感染症，エイズといったような問題が出てくるのではと思う。（2年　M・S）

・私はきちんとした性教育は受けたことがありませんでした。学校でも多少性病や子供が出来てからのことなどやりました。セックスという言葉は出てきませんでした。親からも一言も性について言われたことがなく，なんとなくしずらくて私も話はしませんでした。けれどやっぱり興味はあって，友達との会話や雑誌などから情報は簡単にてにはいりました。この授業を受けて間違った知識に気がつき，とても危険なことをしていたと感じました。私たちですら，性は身近にあったのだから，今の小，中学生はもっと身近に感じているはずです。興味は誰しも持つものだから，それを抑制するのではなく，正しく導くことが大切だと思います。（2年　T・S）

・私は中学校の頃，Hな話だとかセックスの話をすると先生から叱られました。その頃はどうしてなんだろうと思っていました。正しい知識がほしかったのに。（2年　F・A）

## 学習するものセクシュアリティー

「性教育なんて勉強しなくたって動物もセックスしているし，本能だから誰にでも出来ること」と考えている大人が実に多い。本当にそうなのだろうか？　いや動物だって学習しているのである。

1．上野動物園の雄ゴリラの「サルタン」「ビジュ」「モモタロウ」の例[3]

人間に最も近いゴリラの話をしよう。上野動物園にオスのゴリラの「ビジュ」（昨年10月死亡）の2世が今年7月に誕生した。1957年にゴリラの飼育を手がけて以来初の快挙だそうだ。

上野動物園が計画した「ズーストック計画」は全国の動物園や世界の動物園の協力を得てゴリラ（絶滅の危機に瀕している＝シローランドゴリラ＝日本の動物園にいるゴリラはすべてこの種である）の繁殖のプロジェクトを進めている。本来ゴリラは群れで，又家族で生きる動物であり，群れの中で様々な経験や体験と通して大人になるのだそうだ。そのゴリラの習性をもとに，上野動物園ではオス1頭にメス数頭を同居させることになり，オスのゴリラ「ビジュ」がイギリスのハウレッツ動物園（世界的にも有名な自然界に近い動物園である。ゴリラが群れをなして，家族とともに生活している。他のゴリラも繁殖のために数々の2世，3世が世界に旅立っている）から1997年12月に10歳で上野動物園に来たそうだ。そしてまずカップリングのために京都市の動物園から「元気13才」が引き合わされ，日本平から「トト16才」が，そして1999年10月に千葉動物公園から「桃子21才」が合流した。「桃子」とはカップリング開始2日目にして交尾が行われたということである。「ビジュ」は身振りやほえ方から，雌の気持ちを読み取れるようであったという。さらに雌の発情

期に見せる「誘い」に反応し，交尾することが出来た。だがそのその１週間後に「ビジュ」は２世の顔を見ることなく事故でなくなっている。

ところで上野動物園には雄ゴリラは「ビジュ」以外にも，２才で1971年に多摩動物公園に来た「サルタン」という雄ゴリラがいたが，1975年のワシントン条約発効前には親ゴリラを殺して子供だけを獲得する方法が一般的だったため，２才の「サルタン」は群れの中で育っておらず，ペアーの雌と２頭だけで育ったという。「サルタン」は気が荒く雌とももめることが多かった。そんな「サルタン」にも雌の誘いがあったが，その誘いに気づかないこともあったり，交尾の姿勢をとりはしても，その後のやり方がわからずにキレる事もあったという。

「ビジュ」と「サルタン」との違いは生育環境にあった。野生動物は勝手に育つのだはなく，集団の中で社会性はもちろん生殖行動（交尾）も学習するのである。いま「ビジュ」の死亡でメスと交尾経験のある雄はいなくなってしまったそうだ。そして「ビジュ」の忘れ形見の「モモタロウ」は父亡き後母親の「桃子」によって育てられている。そうした環境が「モモタロウ」の繁殖行動にどのように影響するのか想像がつくであろう。

2.　アヴェロンの野生児の例

1800年フランス，アヴェロンの森で発見された野生児，のちに「ヴィクトール」と名づけられた少年は（発見当時，推定年齢12歳）パリへ移され，17歳になるまで研究対象になったり，言語教育を受けたり，感覚教育を受けたりするが最終的に国立聾唖学校の青年医師イタールもその教育を断念する。その後ヴィクトールは家政婦とパリの下町で暮らし「知恵遅れのおじさん」とからかわれ，40歳でその生涯を終えた。

そのイタールの報告書には次のように書かれている。思春期がくると男子の場合，性衝動を自分で自覚してマスタベーションを自然にすると，彼は思っていたがヴィクトールはそうではなかった。マスタベーションなんかまったくしないわけである。自分が教えてやりさえすればするようになるんだろうけど，教えていいのかどうか彼は，多いに悩んだそうだ。又その性衝動らしき様子を次のように書いている。「名状しがたく軍然一体となった陰気と陽気。陰なのか陽なのか，躁と鬱がないまぜになった，訳のわからないような状態。何か物思いにふけって暗いような表情でうろうろ部屋の中を歩いていたかと思うと，突然そこにいた人間にとびかかって首をきつく締めたりする」[4] 何らかの性衝動に似た衝動に苦しめられるが，彼の性衝動には方向性がなく，誰に向かって何をしたいのか彼にはわかっていなかったようだ。そしてイタールは非常に古典的な冷水浴，激しい運動などをヴィクトールに行わせたが意味のないことを悟る。性衝動はあっても性行動を示さない。いや示せなかったといったほうがいいかも知れない。

ケイト・ミレットが『性の政治学』の中において次のように人間の性について考察している。「人間の性を一つの動因とみなすとしても，「幼年期の社会化」においても，また「性行動」と名づけられる成人の経験においてもともに，われわれの生活の膨大な領域は，ほぼ全面的に学習の所産であると指摘することは，やはり必要である。この学習の及ぶ範囲たるや大変なもので，交接（コイタス）行

為そのものさえ，長い一連の学習された反応の産物なのだ。」[5] と。

3.　現在のポルノグラフィーの役割

では私たち人間ははどの様にして学習された反応の産物であるとされる『交接行為』を学ぶのであろうか。家庭の中で，又社会の中で大人が性行為をしているのを見る機会は普通はない。中にはたまたま両親の寝室に寝ぼけて入った時に見かけるくらいであろう。しかし文化の発達した人間社会では特に現代では少年少女の漫画の中にでさえ性描写があふれているし，テレビの画面でも親と気まずい思いをしながら見ていた記憶がある。10代の前半まだ性衝動が現れる以前からいずれおとずれるであろう自分の性行動を創造しながら，そのような読み物やメディアから学習していたのである。

ここで東洋女子短期大学の「女性の健康」と東洋学園大学の「健康教育」の女子学生の履修者によるアンケート調査の一部を紹介しよう。

調査は1998年（平成10年）～2001年（平成13年）の４年間のものである。

| 項　　目 | 1998(H10)(123名) | 1999(H11)(61名) | 2000(H12)(57名) | 2001(H13)(51名) |
|---|---|---|---|---|
| セックスの経験がある | 56％ | 66％ | 61％ | 66％ |
| アダルトビダオを見たことがある | 66％ | 82％ | 58％ | 57％ |
| 見た時期（中１～中３） | 44％ | 33％ | 20％ | 35％ |
| 好きな人に触れたい衝動に駆られた | 78％ | 91％ | 82％ | 83％ |
| それは何歳だったか（10～13才） | 19％ | 17％ | 30％ | 32％ |
| （14～16才） | 32％ | 50％ | 42％ | 43％ |

以上このアンケート調査は授業の履修者のみに実施したものであり，比較的「性」に肯定的な学生が多く履修している傾向があるので，この統計をもって若者の性の傾向を語ることには少し無理があると思われる。しかし女子学生の殆どがテレビ，漫画，雑誌等で性描写を見ているし，アダルトビデオも好奇心ではあろうが約60％の女子学生が見たことがあるとしている。思春期に好きな人に触れたいという衝動に駆られるという項目はに関しては，10歳～16歳で70％を占めている。

子供たちは小さい頃から親の期待と監視の下で，又受験戦争という戦いの下で，子供同士で又自分で自由に性器遊びをしなくなったと思われる。親は性的なことからできるだけ子供を遠ざけ，その他のことには手取り足取りせっせと子供に手をかける。そして子供たちは思春期に入るまで何一つ大人からの学習を受けることなく，思春期に突入し，いきなり放り出されるのである。彼女達は自分の性的興味や衝動についての情報を結局友達からか漫画雑誌に頼らざるを得ないのである。

女子学生のこんなメッセージを紹介しよう。

・小学校から中学３年生ぐらいまではテレビのベッドシーンを見ていて「いいな」と思っていた。中３から高２で実態を知って汚らわしいイメージが強くとてもいやであった。でも今はなんとも思わない。

・小学校高学年から「セックス」は美しいものだと思っていて，好奇心や興味があったが，実際はそんなにきれいではないというイメージに変わった。

小学校高学年から様々なメディアをとおして少女たちは「セックス」に対するイメージを学習し，近い将来自分が経験するであろう「セックス」について創造しているのである。漫画の中で描かれている美しい「セックスシーン」はそのような意味で少女たちが今の学校教育では決して受けられない「性の学習」を想像の世界で体験していると言えないだろうか。少女たちにとってこの時期はまだ恋愛，結婚とセックスを結びつけるものであろう。それが創造の中の「セックス」と実際の体験とのギャップで「セックス」についてのイメージは少しずつ変化していき，，そして繰り返し学習することによって，また体験することによって，自分の性に対する自分なりの規範を模索していくのである。

4．ポルノグラフィーの罪

日本にはポルノグラフィーについての研究資料はないが，アメリカにおいて15～16年前の研究で，ポルノの影響を克明に調べたものがある。男女の性交場面や性器の露出度を目的に作られたポルノは大きな影響はもたない。しかし，ポルノに暴力が加わるとこれは非常に良くないという結論に達し，暴力を伴ったものは心の深いところに影響があり，これは男女ともに基本的な違いはないとして，こうしたものは絶対良くないというのがアメリカのポルダノ研究の共通した結論であるそうだ。

日本のアダルトビデオにしても多くが女性をもの化した扱いをしており，レイプシーン，中には実際のレイプシーンを撮影したものが裁判になったりしたものもある。相手に対しての思いやりなんてものは表現されず，女性と対等に渡れない男性が想像上の世界で女性を貶めようとしているいわば男性のルサンチマンの表れではないかと思えるようなものが実に多い。

一方東洋学園大学の男子学生にも毎年「セクシュアリティー」についてのアンケート調査をしている。アダルトビデオに関しての質問に対しては100％の学生が見ており，実際にその行為を参考にした学生もいる。「あれは（オーラルセックスについての行為）最悪だね！」と言っていた学生がいたが，何故その行為が最悪になったのかを説明してあげれば，それはそれで学習される。しかし今の教育でアダルトビデオを教材で使用しているところはなく，皆何がなんだかわからないまま受け入れていることが多い。怖いことはそのような女性蔑視，攻撃的であることが男性の性であるがごとく刷り込まれてしまうことである。愛や慈しみのないセックスはやはり自己中心主義的な非人間的なもの以外の何者でもない。誰にでも親はあり，その親は髪を振り乱して必死になって子育てをしている。そんな彼，彼女が性の入り口のところで暴力的なポルノに触れ，心の深いところで何か影響を受けてしまわないか心配である。

## 平成12年エイズ発生動向年報にみる性

前述したように平成12年のエイズ動向調査では，上の図１と表１が示すように12年度新たに見つかった感染者数は日本国籍男女合わせて368人であり，その内訳は男性が336人（91％）であり，女性

図1　HIV 感染者国籍別，性別，感染経路別年次推移

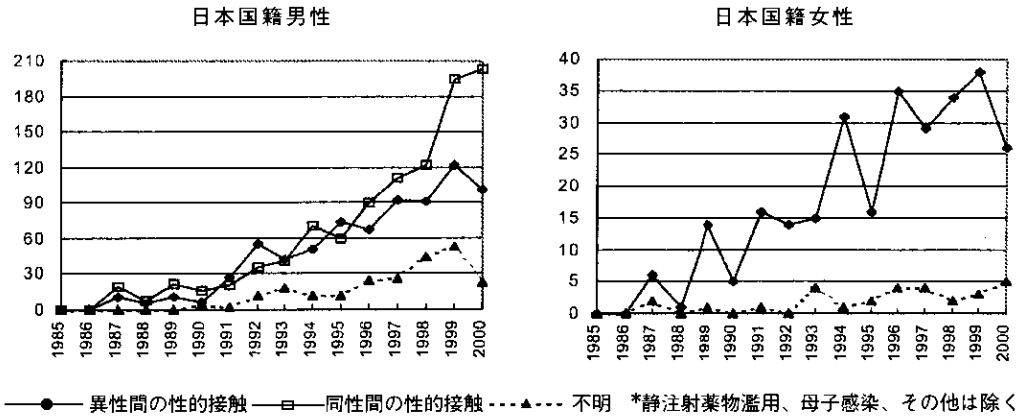


表1　HIV 感染者の国籍別，性別，年齢階級別年次推移

| 国籍 | 性別 | 年齢階級 | 1985 | 1986 | 1987 | 1988 | 1989 | 1990 | 1991 | 1992 | 1993 | 1994 | 1995 | 1996 | 1997 | 1998 | 1999 | 2000 | 合計 | 合計の% |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日本 | 男 | 10歳未満 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 4 | 2 | 0 | 1 | 2 | 11 | 0.5 |
| | | 10-14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.0 |
| | | 15-19 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 3 | 4 | 16 | 0.8 |
| | | 20-24 | 0 | 0 | 2 | 4 | 0 | 2 | 4 | 12 | 20 | 13 | 11 | 22 | 19 | 20 | 37 | 34 | 200 | 9.7 |
| | | 25-29 | 0 | 0 | 9 | 3 | 8 | 4 | 8 | 18 | 15 | 19 | 35 | 31 | 55 | 58 | 79 | 61 | 403 | 19.6 |
| | | 30-34 | 0 | 0 | 7 | 4 | 8 | 4 | 10 | 14 | 15 | 20 | 25 | 38 | 33 | 55 | 65 | 72 | 370 | 18.0 |
| | | 35-39 | 0 | 0 | 10 | 0 | 7 | 4 | 5 | 20 | 10 | 20 | 13 | 25 | 25 | 28 | 45 | 45 | 257 | 12.5 |
| | | 40-44 | 0 | 0 | 2 | 2 | 5 | 6 | 9 | 16 | 17 | 23 | 18 | 23 | 27 | 16 | 43 | 20 | 227 | 11.1 |
| | | 45-49 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 5 | 6 | 7 | 11 | 17 | 18 | 16 | 32 | 23 | 47 | 31 | 217 | 10.6 |
| | | 50-54 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 | 9 | 6 | 6 | 14 | 11 | 13 | 19 | 26 | 21 | 131 | 6.4 |
| | | 55-59 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 4 | 4 | 7 | 6 | 8 | 15 | 17 | 16 | 17 | 100 | 4.9 |
| | | 60歳以上 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 1 | 3 | 5 | 4 | 7 | 5 | 9 | 12 | 23 | 17 | 29 | 118 | 5.7 |
| | | 不明 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0.1 |
| | | 合　計 | 0 | 0 | 34 | 15 | 35 | 27 | 52 | 108 | 102 | 134 | 147 | 189 | 234 | 261 | 379 | 336 | 2053 | 100 |

（囲みは筆者）

は32人（9％）であった。今までの累計報告2390人中（凝固因子製剤による感染者は除く，日本国籍の男女）男性の人数2052人（86％）を見ても全体の中で男性の占める割合が非常に多いことがわかる。そしてその感染経路については同性間の接触が49.5％，次いで異性間の性的接触36.9％で，双方で86.4％を占めている。異性間の性的接触は，年齢のピークが30-34歳で国内感染が大半（64％）を占めている。同性間の性的接触では，25-29歳に年齢のピークがある。一般的に国内感染の割合が高く，過去5年間で90％前後を占めている。

新宿二丁目は現在，世界最大のゲイ・エリアを形成していると言われる。日本のゲイの市場は今や年間300億円，400億円とも言われ，ゲイの人たちが淫乱目的のために集まるサウナ兼ホテルはエイズの温床になっている。セックスが直接的に生殖に結びつかないことから，彼らは避妊しないのだからコンドームなど必要ないと思っているのであろう。欧米でエイズの予防にコンドーム着用が叫ばれているのにもかかわらず，無防備なセックスによるエイズ感染者の増加を招いている。「全ての体液はエロスである，というくらいの感覚がなければ，相手を満足させたり，テンションの高い快楽は得ることは出来ないと思います。……」[6]などのくだりはもちろんヘテロセクシャルについても言えるこ

とではあるが，エイズの温床の淫乱旅館で予防もしないで快楽の追求に走っていいのであろうか大いに疑問である。1980年代後半から90年代初めのエイズ時代になってはっきりと顕在化するようになったが，セイフティーセックスを心がけたいものである。

今回のエイズ動向委員会の統計の中で「性行動の大きな変化」などが背景にあると分析されているが，その原因は「性的パートナーの増加と初交年齢の低下などの性行動の変化が考えられる」との報告には疑問がある。統計の資料を見る限りにおいては HIV 感染者・AIDS 患者ともに必ずしも初交年齢の低下が原因などとは見られない。3割が20代の HIV 感染症であると指摘しているが，実は20代は28.3％であり，問題にすべきは十分成熟していると思われる大人の30代である。30代は34.8％と20代よりも多く，何故この事を問題にしないのか不思議である。当然男性 AIDS 患者数の91％は30代～50代が占めている。日本国籍における全 AIDS 患者の男性比はやはり91％であった。この部分を問題視しないで，何処を問題視するのであろうか。同性間の無防備な性行為をはじめ，援助交際，東南アジアにおける買春ツアー，児童買春など，大人の男性が経済力にものをいわせやっていることは，まさに人権無視の利己主義的セックスである。

現在若者の性行動を問題視し，また性の低年齢化を問題視する傾向があるが，若者の性を問題にし押さえつけることはやめて，「10代の性」をそして「女性の性」を社会的抑圧からの解放をする時期に差し掛かっていると思う。この際，周りの大人と社会は10代が知りたがっている性の知識を十分に学習する機会を与え，真剣に性のことを一緒になって考え，お互いを尊重する関係について学べる環境を整えるべきであろう。

## 多様化する性と今後の性教育

安蔵伸治の調査によると男女の出生性比は女性を100とすると男性は105～107であり，経済力が高まり，医療，公衆衛生が進むと乳幼児死亡率が非常に低下し，その出生性比のまま成人に達する。1990年においては，44歳以下0歳に到るすべての年齢で，女性より男性の人口が多いというデータがあり，そして女性20歳から29歳の年令において95％が結婚にいたっている。ところが1990年以降20代後半から30代前半の未婚率は着々と進んでおり，25歳から29歳の未婚率は40.2％と増大している[7]。未婚化の時代に突入した。

ヘテロセクシュアル，バイセクシュアル，ホモセクシュアル，トランスジェンダー，インターセックスと性が多様化していて，いまだに法律では多くの問題が存在するがこれらは少しずつ黙認されつつある[8]。ヘテロセクシュアルも含め，セックスは生殖のためのものだけではないということである。これらは直接生殖に関わらない性行動をとるアフリカのボノボ（最後の類人猿）の性行動（ホカホカ等）を連想させる。彼らは社会的緊張が高まるとこのような性行動を行い，緊張をほぐしているようだ。

いずれにしても性は今後もっと多様化していくだろう。しかしどんな性向があろうとそれぞれがそれぞれを認め合い，尊重しあう関係を築いていきたいものだ。そんな関係を築くための性教育はどんなものにしたら良いのであろう。

## どんな学習が必要か

まず第1には，からだの中の一つのパーツである生殖器は他のからだの器官と同等に学習すべきことだという事である。筆者の大学時代人体解剖学やら人体生理学を学んだが，生や生命に関わる生殖器についての説明はなされなかったし，そこは自分でこっそり学ばなければならなかった。中枢の脳・脊髄の機能に始まり，抹消の器官の働きや視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚などの感覚器，神経系，ホルモン系，分泌液等人体の様々な現象について学びながら，悲しみとか神経の興奮とかで涙が出るように，又体温調節で汗やら鳥肌が立つように，又糞や尿や鼻水や唾などの排泄物は出るように，生殖器からカウパー液や精子が出るし，おりものや月経やバルトリン腺液が出ることは自然なことであるとは教えられなかった。小・中学校の頃から自分の体に関わるあらゆる機能や分泌液や排泄物について学習することは自分のからだの調子とかリズムを知る上でとても大切なことであるし，特別に性教育と名づけて生殖器ばかりを強調することでもないと思うのである。大人にとって「性」は特別なものであり，恥ずかしいものであり，隠さなければならないものであるから，子供たちは自分たちの一番知りたいことは結局は友達同士か，雑誌等で知識を得ていくしかないのである。無難な内性器やらホルモンの授業は，いま一つ具体性にかけたぴんと来ない授業になる。

自分の体を知るということは，自分の体を大切にするということでもあり，しいては相手の体もいたわれるようになることではないか。思春期はちょうど様々な体の変化がある時期なのでいいチャンスでもある。射精したからといって，生理になったからといって「はい今日からあなたは大人です」ということではなく，からだもこころも徐々に成熟していく中で自分の性的アイデンティティーを確立していくのである。そんなときだからこそ包み隠すことなく，具体的に体にパーツの一部分として知りたがっていることを堂々と大人は子供に向けて発するべきだと考える。

そしてもう性の話は「恥ずべきもの，隠す必要があるもの」などの考えは捨て，特に女性は自分の顔を鏡で見るように，性器も鏡で見たり，膣に指などを入れてみたり，分泌物の匂いをかいで見たり，そろそろ自分で自分のからだのことを観察してみる必要があるのではないだろうか。

第2にそれぞれの「個」を認める教育である。男とか女とかのカテゴリーへの所属は4歳～5歳でもう出来上がっていると言われる。3歳がその臨界期であるともいう。自分が男であるとか女であるとかはおとなの言葉によって刻印付けられ，アイデンティティーが造られるとも言われる（性自認）。しかし画一的に男だから女だからというカテゴリーで自分の行動を制約することはおかしいし，そのときの状況の中で自分が表現したいように表現でき，又自分が行動したいように行動できる教育であってほしい。それが人間の関係性を学ぶ機会にもなるし，様々な抑圧からの開放につながると思うのである。もう「おとこらしさ，おんならしさ」に振り回されることなく「自分らしく」生きる時代なのではないか。

第3は誰もが経験する「性の衝動」についてを，からだの変化との関連の中で，どのように対処していけばいいのかを学習する必要性である。そのためにはまずマスタベーションについて学ぶことであると思う。多くの偏見の中で，自分のからだの快楽について多くの女性が模索することなく生きて

来たことは女性のセクシュアリティーを一層貧弱にしてきた。まだ未だに女性はマスタベーションをするものではないと思っている若者も含め，大人が多いことには驚く。なかには「あの人好きね，あの人欲求不満じゃないの？」と女性に向かっていう人がいるが，本当に性の知識のない人から偏見に満ちた言葉を聞くことほど情けないことはない。性は一方的に与えられるものではなく，女性は積極的に自分の快感を探るべきである。自分で快感がわからなくて何故相手のことがわかるのか。脳内モルヒネ（エンドルフィン）というホルモンによってわれわれ人間の脳の快感が現れることがわかっているオーガズムに達する前に分泌されるホルモン DHEA[9] は免疫システムを強化させ，ストレスホルモンに対抗することもわかってきた。男女を問わずからだと心の緊張を和らげるためにもセックスやマスタベーションを学ぶべきである。

又いまだに男性の性欲が女性に勝ることを信じてやまない人は，男の子に激しい運動を奨励することによって性欲を昇華ですると信じている。激しい運動の後の性的衝動があることを知りながら。

第4は何よりも大人が「性は生であるということ」，「人生に於いて性はもっとも大切ですばらしいものの一つであるということ」，「性はお互いの思いやりと慈しみと情熱と相手に尽くす気持ちであるということ」「性は共鳴，一体感，癒しとしてのもの」「性は生きる喜びを分かち合うためのもの」「性はお互いのコミュニケーション」であり，決して下品でもなく，下半身の問題でもなく，いやらしいものではないなど再度学習しなおしてほしいものだ。また大人の男性に関していえば，昨年ベストセラーにもなった本の中に「男は感情で表現できないことを，セックスで解決しょうとする。新しい仕事が見つからない，借金を返済する，紛争を解決するといった悩みを抱えている時，張りつめた気持ちを和らげるのにセックスという手段を用いる」という一文があったが，むしろ男性がセックスという形でしか表現できないように育てられ，仕向けられてきたのではないかと思うのである。その強迫概念によって多くの男性はストレスの癒しを性産業に求めてしまうのであり，その結果性は秘めごとになってしまうのである。

大人が子供に「性」のことを質問されると大方の大人はどう答えていいのかわからないく，おどおどしてしまう。自分たちがしていることがそんなにいやらしいことなのだろうか。又男性の自分勝手な性でどれほどの女性が寂しい思いをしていることであろう。それとも今更おとなの男性に期待することは無理なのだろうか。

## まとめ

性への解放の時代は，日本の社会が高度成長を遂げている間に到来している。「性」が高度に抑圧された中で，若者は結婚前に「性」にアクセスしやすい環境になって来ているし，今までの純潔教育に疑問を持つようにもなってきた。70年代の学生運動をきっかけにフェミニズムが叫ばれ，男女平等が各階を浸透していき，自由を手に入れるために様々な主張が繰り返され，この時期徐々に女性の性の解放が進んでいった。80年代以降男女ともに「20歳過ぎても処女・童貞はおかしい」などというプレッシャーがかかり，90年代になって「性への解放」から「性からの解放」へ向かい，確実に男女が「自分らしさ」への追求をしはじめた。

長く続いた性的男性支配は女性をそして若者・子供の性を勝手にコントロールしようとして来たが，エイズの項のコメントにも現れているように，若者の性の初交年齢の低年齢化などと嘆くことの方がもってのほかである。われわれ大人がどんなにか若者の性を押さえつけようと性の衝動は起こりうるものである。子供たちは残念ながら漫画などによるポルノで大人よりも純粋に性の学習をしているのである。

今の時代価値観の多様化で若者の多くは自分はどの方向に向いて行くべきか定まらなくて返って劣等感のかたまりとなり，自分の将来のことより今の自分の欲求を追及してしまう。人間には一生をかけて達成しなければならない発達課題を持っているが，思春期のそれはまさにアイデンティティーの確立である。そんな時だからこそ「自分らしく」生きられるように自分のこと性のことをもっとオープンに語れるようになりたい。そうすれば性はそんなに卑猥なものでもなくなり，恥ずかしいものでもなくなる。人間として学習されたとても自然な行為であり，誰もがその快楽を享受できるものである。抑えたり，隠そうとしたりすると返って子供たちは見たくなるし，興味半分でやってみたくもなるもので，子供達の疑問には包み隠さずどんどん答えてやることである。「性」について真剣に考え，学習することによって実は子供たちの「性」へのアクセスの仕方はより慎重になるはずである。

**注**

(1)　『夜這いの民俗学』の引用

(2)　『性の歴史学』p. 132

(3)　教育新世紀　YOMIURI NO-LINE 東京チルドレン http://www.yomiuri.co.jp/education21/news/kikaku11_08.thm

(4)　『セックス神話解体新書』p. 155. ヴィクトールの思春期の変化を表わしている。

(5)　『性の政治学』p. 83

(6)　『プライベート・ゲイ・ライフ』p. 26.「やっぱりゲイの人ってアナルセックスをするんですか」という問に答えて。

(7)　『未婚化の社会学』p. 14「結婚市場と結婚力」桐朋学園大学研究紀要第12集，1986年

(8)　ヘテロセクシャルは（異性愛），バイセクシャル（両性愛），ホモセクシュアル（同性愛），トランスジェンダー（性転換），インターセックス（半陰陽で男でも女でもない性，2000人に１人は半陰陽でうまれるという）

(9)　体内の副腎皮質から分泌されるホルモンで正式には「デヒドロエピアンドステロン」というアメリカで５年前に，その効果についての研究発表がなされている。

**参考文献**

赤松啓介『夜這いの民俗学』明石書店　1994年
石川弘義「メディアと性」『現代性教育月報』1998年９月号（Vol. 16, No.9）
上野千鶴子『女という快楽』頸草書房，1986年
大橋照枝『未婚化の社会学』ＮＨＫブックス　1993年
小倉千加子『セックス神話解体新書』ちくま文庫　1988年
アラン・ピーズ，バーバラ・ピーズ　藤井留美訳『話を聞かない男，地図を読めない女』主の友　2000年
伏見憲明『プライベート・ゲイ・ライフ』学陽文庫　1998年
藤田ゆき『性の歴史学』不二出版　1999年
ケイト・ミレット　藤枝澪子・加地永都子・滝沢海南子・横山貞子共訳『性の政治学』ドメス出版　1985年
村瀬幸治，鈴木水南子『買春と売春と性の教育』十月舎　2001年

教育新世紀　YOMIURI NO-LINE 東京チルドレン http://www.yomiuri.co.jp/education21/news/kikaku11～08.thm
平成12年度エイズ発生動向年報　　総括　　厚生労働省エイズ動向委員会　厚生労働省　2000年
日本経済新聞　2001年７月24日